

令和元年度
【短期研究2】

遺されたきょうだいのレジリエンス

(要旨)

本研究は、殺人、事故、自死といった外傷的な喪失によってきょうだいを失った「遺されたきょうだい」の文献レビューを行い、①遺されたきょうだい特有の死別後の経験やネガティブな心身への影響、②遺されたきょうだいの回復に必要な個人内外の要因とそれらによって生じる回復プロセス（レジリエンス）の2点を検討することを目的とする。

CiNii, PubMed および Google Scholar を用いて研究資料を検索したところ、国内外合わせて 355 件の文献が抽出され、その内 32 件の文献を分析対象とした。レビューの結果、国内外問わず外傷的な喪失を経験した遺されたきょうだいの研究は乏しいことが示された。遺されたきょうだい特有の経験として、きょうだいは悲嘆に苦しむ親をこれ以上苦しませないため、感情を表出しないようにする傾向があることが示唆された。また、特に青年期に喪失を体験したきょうだいは、ロールモデルとなるはずの故人そのものと、安定した情緒的サポート源となるはずの親の双方の存在を失うことで、アイデンティティの確立という通常の発達課題の達成が妨げられ、悲嘆反応が複雑化しやすいことなども示された。その一方で、故人以外のきょうだいや、友人などから情緒的サポートを受けること、早期に学校や仕事に復帰することは、遺されたきょうだいが健康な状態へと回復していく上で重要であることが示唆された。また、きょうだいは遺品を所持することなどによって、複雑な感情が伴うきょうだい関係を整理しながら故人と内的な絆を結び直すこと、そしてその内的な絆の形成は喪失の回復に重要な意味づけを促進しうることも示された。最後に、文化差を加味した研究の必要性や研究法の精緻化といった視点から、今後の研究の展望と課題について整理した。

研究体制：太田美里，加藤寛，亀岡智美

I. 問題と目的

大切な人との死別は、人生の大きな危機の一つである。中でも、殺人、事故、自死のように、予期せず暴力的な死別によって愛する者を失う体験は、遺族に大きなトラウマ（心的外傷）をもたらすことがある（Currier, Holland, & Neimeyer, 2006）。実際、こうした外傷的な喪失を体験した遺族は、心的外傷後ストレス障害（Post Traumatic Stress Disorder 以下、PTSD）等の精神疾患に罹患するリスクが高いことが示されている（Kristensen, Weisæth, & Heir, 2012）。本邦の平成 30 年度における犯罪による死亡者数は 690 名であり、交通事故では 3,532 名（警察庁, 2019a）、自死では 20,840 名にのぼる（警察庁, 2019b）。このような状況を鑑みると、前述した被害者の数倍の人々が凶らずも「外傷的な喪失を体験した遺族」となっていることが予想される。こうした遺族の心的理解を深めることは、遺族に対する心理的ケアの質を向上させる上で重要である。

特に、外傷的な喪失によってきょうだいを失った「遺されたきょうだい」の支援において、心理学的研究が担う役割は大きいと予想される。例えば Dyregrov & Dyregrov (2005) は、“The forgotten bereaved” (忘れられた遺族) として遺されたきょうだいを表現し、子どもを失った親に注意が向けられる一方、きょうだいに支援が行き届いていない現状に警鐘を鳴らしている。我が国においても、きょうだいへの支援が後回しにされていることから、2016 年に第 3 次犯罪被害者基本計画が策定され、きょうだいに対するこころのケアや登校支援の充実化を図る方針が打ち出されている（仲, 2018）。こうした状況を踏まえると、外傷的な喪失を経験した本邦のきょうだいを対象とした研究を行い、その知見をきょうだいへの支援の拡充に繋げていくことは重要な課題であると考えられる。そこで、本研究ではまず、予期せず暴力的な死別によって大切なきょうだいを失った「遺されたきょうだい」の文献レビューを行い、先行研究の知見を整理し、今後の研究の展望や課題を明らかにすることを目的とする。なお、本研究では先行研究に倣い（Norris, 1992 ; Currier et al., 2006）、殺人、事故、自死を外傷的な死別とする。

本研究では遺されたきょうだいの文献レビューを行う際に、以下の 2 点を検討する。まず 1 点目は、遺されたきょうだい特有の死別後の経験やネガティブな心身への影響についてである。大切なきょうだいとの死別に伴う経験や、心身への影響を理解することは、遺されたきょうだいの心情に即した支援の構築や、今後の研究の課題を明らかにする上で重要と考えられる。

2 点目は、遺されたきょうだいにおけるレジリエンスの検討を行う。レジリエンス (resilience) は、人間の「回復」を示し、重篤なストレスからの良好な適応とそれに必要な個人と環境の資源に着目した概念である。上述の死別後に生じるネガティブな心身への影響のみならず、適応的な変容プロセスとそれに必要な個人内外の要因を整理することは、きょうだい個人が持つ資源の理解やそれを活かすサポート体制を構築する上で重要と考えられる。

なお、レジリエンスは重篤なストレスからの適応とそれに必要な個人内外の資源を検討

した概念であることは一定の理解が得られているものの、その心理学的定義は多様化しており、統一した見解を得られていないのが現状である。具体的には、「適応を促し、ストレスの負の影響を緩和する個人特性」(Wagnild & Young, 1993, p.165)と捉える立場と、「深刻な逆境の中で、肯定的な適応をもたらす力動的なプロセス」(Luthar, Cicchetti, & Becker, 2000, p.543)に注目する立場、さらには先述した2つの定義を包括した、「困難あるいは脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程、能力、あるいは結果」(Masten, Best, & Garmezy, 1990, p.426)と捉える立場の3つに分類できる。本稿では遺されたきょうだいのレジリエンスを幅広く理解するため、いずれの定義の論文も採用し、レジリエンスと明確に述べられていない論文であっても、きょうだいの適応的な変容プロセスやそれに資する個人内外の資源や対処方略について検討された論文であれば、レビューの対象とする。

また、本研究ではレジリエンスを検討する際、特に「意味づけ (meaning making)」にも着目する。紙面の都合上詳細なレビュー割愛するが、意味づけの定義やメカニズムの理解は研究者間によって多少異なる。意味づけ研究の詳細なレビューを通して構築された Park (2010) の統合的意味づけモデル (Integrated model of meaning making) によると、人間は独自の信念システム (世界観や自己観) を保持しており、外傷的な出来事に直面すると、個人が保持している信念システムと出来事の評価に差が生じることから、人は意味づけに動機づけられると考えられている。例えば、殺人で大切な家族を失うという出来事は、故人が明日も生きている、世界は安全であるといった個人の信念を打ち崩す体験をもたらす、それによって人は「なぜ (Why)」このような出来事が起きたのかと、意味を探索・生成していく。先行研究では (e.g. Bower, Kemeny, Taylor, & Fahey, 1998 ; Park, 2010), こうした探索プロセスそのものや、そのプロセスを経て生じた理解を、既存の信念へ統合していくことを意味づけとしている (Park, 2010)。具体的には、外傷体験を通じて否定的な自己観や他者観を持つなどのネガティブな意味づけや、危機的な出来事を経て自らの人間的な強さをより実感するなどのポジティブな心理的変容を示す「心的外傷後成長 (Post-traumatic growth 以下, PTG)」が挙げられる (Tedeschi & Calhoun, 2004, p.1)。意味づけとレジリエンスは異なる概念ではあるが、外傷的な喪失の適応に必要な個人の資源やレジリエンスの結果の一つとされているため (Harvey, 1996 ; Lepore & Revenson, 2006 ; 小西, 2006), 本稿では意味づけを遺されたきょうだいの心的理解やレジリエンスを検討する上で必要な概念と考え、レビューを行う。

II. 方法

文献検索のプロセス

分析対象とする文献は、①殺人、事故、自死のいずれかの出来事によってきょうだいを失った「遺されたきょうだい」を対象者に含むことを絶対条件とし、②遺されたきょうだいの死別後の体験や心理的影響及び適応までのプロセスについて検討していること、ある

いは③遺されたきょうだいの適応に資する個人内外の要因を明らかにしていることのいずれかを満たすものを選定した。なお、外傷的な喪失という死別の出来事の影響や、遺されたきょうだいに特化した分析・考察がなされていない文献、特定の心理療法の効果を主に検討した文献は除外した。

海外の文献検索は、PubMed および Google Scholar を利用し、国内の文献検索は CiNii と Google Scholar を用いた。国内外問わず、上記のデータベースと併せてハンドサーチも行った。文献検索の条件は、雑誌論文あるいは書籍とし、発行年数は特に定めなかった。国外の文献は“bereaved siblings” or/and “resilience” or “meaning”，国内の文献は「きょうだい」に加え「悲嘆」、「喪失」、「レジリエンス」、「意味づけ」のいずれかの語句が含まれているものを抽出した。検索実施日は2019年11月15日であった。

2019年11月15日に、データベースおよびハンドサーチにより検索された論文355件の文献について、タイトルおよび抄録を精査し、分析対象のスクリーニングを行った。その結果、選定基準を満たさない323件を除外し、最終的に入手可能であった32件の文献をレビュー対象とした。

なお、選定基準に従い採用した国外の文献は27件、国内の文献は5件であった。

Ⅲ. 結果

1. 遺されたきょうだいの心身への影響

遺されたきょうだいの喪失後の経験やネガティブな心身への影響について述べられた国外の文献は22件 (Adams, Hawgood, Bundock, & Kólves, 2018 ; Alves-Costa, Hamilton-Giachritsis, & Halligan, 2018 ; Dyregrov & Dyregrov, 2005 ; Dyregrov, Dyregrov, & Kristensen, 2015 ; Gamino, Hogan, & Sewell, 2002 ; Forward & Garlie, 2003 ; Kasahara-Kiritani, Ikeda, Yamamoto-Mitani, & Kamibeppu, 2017 ; Kennedy, Chen, Valdimarsdóttir, Montgomery, Fang, & Fall, 2018 ; Khang, Lee, & Kim, 2018 ; Kristensen, Dyregrov, Dyregrov, & Heir, 2016 ; Lindqvist, Johansson, & Karlsson, 2008 ; Lohan & Murphy, 2002 ; Moss & Raz, 2001 ; Packman, Horsley, Davies, & Kramer, 2006 ; Pettersen, Omerov, Steineck, Dyregrov, Titelman, Dyregrov, & Nyberg, 2015 ; Rostila, Berg, Saarela, Kawachi, & Hjern, 2017 ; Rostila, Berg, Saarela, Kawachi, & Hjern, 2019 ; Rostila, Saarela, & Kawachi, 2013 ; Rostila, Saarela, & Kawachi, 2014 ; Shalev, Dargan, & Abdallah, 2019 ; Sundar & Nelson, 2003 ; Van Riper, 1997), 国内では5件 (仲, 2018 ; 野坂, 2006 ; 大和田, 2006 ; 白井・中島・真木・辰野・小西, 2010 ; 高柳・辻尾, 2003) であった。全体として文献の数は少ないものの、海外では遺されたきょうだいの心身の影響について大規模な心理学的研究が行われているのに対し、国内で確認された同様の研究は白井ら (2010) の報告のみであった。

(1) 外傷的な喪失に伴う遺族の反応

外傷的な喪失によって子どもを失った親などの遺族と同様に、遺されたきょうだいは死別後、死が信じられない気持ち、抑うつ、加害者あるいは故人に対する怒り、自身が生きることや故人を助けられなかったことに対する罪悪感など、混乱した感情を体験する (Dyregrov & Dyregrov, 2005; Kasahara-Kiritani et al., 2017; Adams et al., 2018)。外傷的な喪失は、予期できず、故人の死因が非常に暴力的であるという性質から、通常の喪失後にも生じる心身の症状を示す「悲嘆 (grief)」と、犯罪被害などの外傷体験に直面した際に生じる「トラウマ反応」の双方、つまり外傷性悲嘆を経験する場合がある (Dyregrov et al., 2015)。なお先行研究では、子どもを亡くした親は侵入症状が強いことに対し、より若いきょうだいは回避症状が強いことが報告されている (Dyregrov & Dyregrov, 2005; Dyregrov et al., 2015)。遺されたきょうだいは、大切なきょうだいの喪失について話すことを避けるようになり、人知れず外傷性悲嘆が悪化し、学校や仕事に通えなくなるケースや、ネット、薬、アルコールに依存する場合もある (Khang et al., 2018; 仲, 2018)。さらに、きょうだいを失っていない者に比べ、殺人等の外傷的な喪失によってきょうだいを失った者は脳卒中のリスクが50%も高いことが報告されており (Rostila et al., 2013)、大切なきょうだいの喪失は遺されたきょうだいの心身に大きなダメージを与え、長期的な健康にも多大なる影響を及ぼすのである。

(2) 遺されたきょうだい特有の喪失後の体験

多重の喪失

先述した症状は、故人との関係に関わらず、外傷的な喪失を体験した遺族の多くが経験する可能性がある。では、「遺されたきょうだい」特有の喪失後の体験とはどのようなものなのであろうか。まず、「きょうだい」とは、生涯に渡って継続されることが期待され、遊び相手やライバル関係、自己や世界を理解し、探索していく上でのロールモデルにもなりうる非常にユニークな関係性であることが指摘されている (Adams et al., 2018; Khang et al., 2018)。そのため、「きょうだい」の喪失は、遺されたきょうだいにとって多様な関係性の喪失を意味するのである。また、遺されたきょうだいは、きょうだいそのものだけでなく、安定した情緒的サポート源であるはずの家族をも失うことに繋がる。当然のことではあるが、子どもを亡くした親は自らの喪失体験に圧倒され、遺された子どもに対して安定して関わるのが難しくなる (e.g. Forward & Garlie, 2003)。先述の、遺されたきょうだいが喪失に伴う感情について話すことを避けるといった行動は、悲嘆反応に苦しむ親をこれ以上悲しませないよう、自身の気持ちを隠すようになった結果とも考えられる (e.g. Dyregrov & Dyregrov, 2005; Lohan & Murphy, 2002; Moss & Raz, 2001)。実際に、遺されたきょうだいは悲嘆に苦しむ他の家族成員が自身に注目することを嫌がったり、逆に情緒的に親を支えたりすることが示されている (Adams et al., 2018; 仲, 2018; Khang et al., 2018)。遺されたきょうだいは、悲嘆に苦しむ親を目の当たりにし、故人に比べると自分は必要の

ない存在なのではないか、自分が死んだ方が良かったのではないかなどと自身に無価値観を感じる一方、いつまで親は悲しんでいるのかと怒りを感じたり、喪失に対する親と自身の対処方略の違いに葛藤が生じたりするなど、家族間において複雑な感情を体験する（仲，2018；Adams et al., 2018；Van Riper, 1997）。また、特に故人が家族関係の調整役であった場合には、死別後に家族との繋がりが消失してしまうといった家族関係の変化にさらされることもあり（Gamino et al., 2002）、遺されたきょうだいは自身が家族を守らなければならないと感じるなど、家族役割や将来設計を変更する必要性に迫られることもある（大和田，2006）。このように、遺されたきょうだいは多様な関係性を担っていた自身のきょうだいを喪失するだけでなく、家族力動の変化に直面し、関係性の変化や複雑な感情に揺れ動くのである。

遺されたきょうだいの性差と発達段階

Rostila et al. (2013) は、遺されたきょうだいの喪失に伴う心身への影響について、外傷的な喪失か否かに関わらず、女性の方がきょうだいの喪失にネガティブな影響を受けやすく、きょうだいの死によって脳卒中になるリスクは男性より女性の方が高いことを明らかにしている。また、統計的に有意な性差は示されなかったが、複雑性悲嘆などの精神疾患の尺度において、カットオフ値を超えた者のパーセンテージが、男性より女性の方が高いという報告も存在する（Dyregrov et al., 2015）。これらの結果には、男性よりも女性の方が情緒的な結びつきを重視する傾向にあることが影響しているのではないかと考えられている（Rostila et al., 2013）。

また、発達段階によっても遺されたきょうだいの体験は異なる。例えば、幼児期の子どもは、死の概念を正確に理解することが難しいため、きょうだいがなくなった理由を自身に帰属し、罪悪感を抱きやすいことが示されている（高柳・辻尾，2003）。加えて、幼児期の子どもは言語能力が未発達であるため、遊びや分離不安などの行動によって死別の葛藤が表現されやすく（高柳・辻尾，2003）、子どもの発達の程度に合わせて、率直にきょうだいの死について子どもの疑問に答えるなどして話し合うことが必要と指摘されている（Dyregrov & Dyregrov, 2005；Packman et al., 2006）。

特に、きょうだいの死別によって心身にネガティブな影響を受けると報告されているのが、青年期のきょうだいである（e.g. Kennedy et al., 2018；Rostila et al., 2017；Rostila et al., 2019）。交通事故で弟を亡くした青年期女性との心理面接を報告した野坂（2006）は、青年期における死別は罪責感が伴いやすく、故人との関係性が感情の強さに影響しやすいこと、また、将来の不確かさや再喪失の不安などによって、将来展望を持ちにくくなることを指摘している。こうした将来の不確かさに対する不安は、アイデンティティの確立という青年期の発達課題の達成を困難にする（野坂，2006）。さらに、遺されたきょうだいに対し、再喪失の不安によって親が過干渉になったり、周囲の人々が故人の分まで懸命に生きるよう期待したりするといった関係性の変化も、青年期のきょうだいのアイデンティティの確立を妨げると考えられている（Lohan & Murphy, 2002）。

出来事の性質

本稿は、事故・殺人・自死という外傷的な喪失に関する文献レビューを行ったが、当然ながら出来事の内容によって遺族への影響は異なる。

まず、殺人や事故は加害者が存在することから、遺族は警察の捜査や裁判を経験することとなる。裁判は親だけが参加するケースが多く (Kristensen et al., 2016)、遺されたきょうだいは加害者の刑罰を気にしたり (Lohan & Murphy, 2002)、加害者に対する怒りや憎しみを感じながらも (Shalev et al., 2019)、故人が加害者に関わることを自身が止めておけば事件を防げたのではないかなどと自責感に苛まれたりすることもある (仲, 2018)。また、テロといった意図的な殺人は、遺族に多大なる恐怖感をもたらすことも特徴的である (Kristensen et al., 2016)。さらに、事件によっては被害内容がメディアに大きく取り上げられることもあり、そうしたメディアへの暴露は複雑性悲嘆と正の関連を示すことが明らかとなっている (Kristensen et al., 2016)。本邦の遺されたきょうだいの事例においても、事件が広く周囲の人に知られたため、友人からの目が変わったなど、円滑に対人関係を築くことが難しくなったケースが報告されている (仲, 2018)。

自死の場合、遺族は自ら命を絶った故人に対する怒りを感じる一方で、そのような感情を抱くことに罪悪感が生じることがある (Lindqvist et al., 2008)。また、自死に対する社会的なスティグマによって、恥を抱え、喪失の話を周囲にすることが難しくなることも自死遺族の大きな特徴とされている (Pettersen et al., 2015 ; Rostila et al., 2014)。さらに、大切なきょうだいや周囲の人に助けてもらえず自死に繋がったことから、自身も助けてもらえないのだと感じ、遺されたきょうだいが他者への援助希求を行い難くなるケースも報告されている (Pettersen et al., 2015)。

2. 遺されたきょうだいのレジリエンス

遺されたきょうだいの回復に必要な要因や回復プロセス (意味づけも含む) について検討がなされた国外の文献は 15 件であり (Adams et al., 2018 ; Alves-Costa et al., 2018, Cohen & Katz, 2015 ; Cozza, Fisher, Fetchet, Chen, Zhou, & Fullerton, 2019 ; Dyregrov & Dyregrov, 2005 ; Forward & Garlie, 2003 ; Gamino et al., 2002 ; Henderson, Bond, Alderson, & Walker, 2015 ; Hogan & DeSantis, 1994 ; Kasahara-Kiritani et al., 2017 ; Levi-Belz & Lev-Ari, 2019 ; Moss & Raz, 2001 ; Packman et al., 2006 ; Rostila et al., 2019 ; Sundar & Nelson, 2003)、その内 10 件 (Adams et al., 2018 ; Alves-Costa et al., 2018 ; Dyregrov & Dyregrov, 2005 ; Forward & Garlie, 2003 ; Gamino et al., 2002 ; Kasahara-Kiritani, 2017 ; Moss & Raz, 2001 ; Packman et al., 2006 ; Rostila et al., 2019 ; Sundar & Nelson, 2003) は「1. 遺されたきょうだいの心的影響」で挙げた文献にも含まれた。国内においては、仲 (2018) がきょうだいの精神的健康に寄与した関わりについて言及しているのみで、レジリエンスを検討している文献は見受けられなかった。海外においても、遺されたきょうだいのレジリエンスを検討した研究は特に乏しく、主に 2000 年以降に調査が始まっていることがうかがえた。た

だし、レジリエンスを明確に定義づけ、検討している論文はほとんど見受けられなかった。なお、遺されたきょうだいの回復を検討する上で、保護的要因だけではなく、精神的健康を妨げるリスク要因も理解することが重要と考えられたため、回復のリスク要因にも着目したレビューを行った。

(1) 遺されたきょうだいのリスク因子と回復に必要な要因

個人要因

Cozza et al. (2019) は、テロを経験した遺族を、健康なグループ、PTSD と 3 つの症状（抑うつ、不安および悲嘆）が伴うグループ、PTSD が伴わず先述した 3 つの症状があるグループに分け、健康なグループと他の 2 つのグループの違いを検討した。その結果、若年層であること、過去に他のトラウマ体験を経験していること、学歴の低さは、外傷的な喪失の回復におけるリスク要因であることが示された (Cozza et al., 2019)。

回復を促す要因としては、安定的な愛着スタイルが遺されたきょうだいの回復に重要な役割を果たすことが指摘されている (Cohen & Katz, 2015)。安定型の愛着スタイルの者は、状況に応じたコーピングを柔軟に用いることができ、外傷的な喪失によって生じた新しい理解を既存の信念体系に統合しやすく、悲嘆が複雑化しにくいといった特徴があり、レジリエンスの結果の一つとして考えられている PTG と正の関連が示されている (Cohen & Katz, 2015)。

また、他者にサポートを求めたり、気持ちを表現したりする力も、遺族の回復に重要であることが多くの先行研究で指摘されている (e.g. Sundar & Nelson, 2003)。Levi-Belz & Lev-Ari (2019) は、複雑性悲嘆反応に対する自己開示と愛着スタイルの交互作用を検討しており、愛着スタイルに関わらず自己開示を行う者は、複雑性悲嘆の評価点が低いことを明らかにした。そして、喪失からの回復においては、愛着スタイルそのものが悲嘆反応を予測するのではなく、不安定な愛着スタイルを持つ故に他者にサポートを求められず、このことが悲嘆を複雑化させると述べている (Levi-Belz & Lev-Ari, 2019)。

さらに、前述したとおり、悲嘆のプロセスにおいて生じる様々な危機に対し、遺されたきょうだいがある有効なコーピングを用いることは回復に重要である (Cohen & Katz, 2015)。実際に、喪失後も仕事や学校といった日常の生活を維持し、ボランティアなど意義ある活動へ参加したり、スポーツを行い食事を整えるなど自分をケアしたりする行為が、喪失に直面する時間を低減し、ストレス関連の症状を軽減させることに繋がったとする報告が見受けられる (Hogan & DeSantis, 1994; Sundar & Nelson, 2003; Kasahara-Kiritani et al., 2017)。また、自然死に限定されるという指摘もあるが (Henderson et al., 2015)、宗教的コーピングも故人の死を理解する際に有効であることが示唆されている (Gamino et al., 2002)。この他、月日を経ても忘れないよう、日記やネット上に故人との思い出を保管するといった対処も、後述する意味づけプロセスに重要と考えられている (Adams et al., 2018; Gamino et al., 2002)。

環境要因

遺されたきょうだいにとって、ソーシャルサポートが回復に重要であることは多くの研究で示されている (e.g. Henderson et al., 2015)。ソーシャルサポートといっても、食事のサポートや裁判、悲嘆に関する専門的な情報を与えてくれるといった道具的サポートから、気持ちを聴いてくれるなどの情緒的なサポートまで多様である (e.g. Alves-Costa et al., 2018 ; Sundar & Nelson, 2003)。先行研究の中では、親と同居しているきょうだいは別居しているきょうだいに比べ、精神的健康が低いことが示されている。その理由として、後者のきょうだいは、自身が構築した新しいコミュニティや配偶者などからサポートを受け、精神的健康を維持している可能性があると考えられている (Dyregrov & Dyregrov, 2005)。また、故人の他にきょうだいが存在することも重要であり、3人以上きょうだいがいることは喪失に伴う精神疾患の保護的因子となることが示されている (Rastila et al., 2019)。なお、家族間で支え合うことが難しい場合でも、友人や同じ経験をした遺族の情緒的サポートが、遺されたきょうだいの支えとなることも報告されている (e.g. Sundar & Nelson, 2003 ; Moss & Raz, 2001)。また、精神科医や心理士といった専門家からのサポートはもちろんのこと (Kasahara-Kiritani et al., 2017)、殺人や事故の場合、事件の内容が公的に報道されることもあり、この際時系列に沿って具体的に話を聴いてくれた記者とのやりとりが、遺されたきょうだいの気持ちの整理に繋がったという報告も存在する (仲, 2018)。

ただし、レジリエンス研究において重要な「文化」の影響を加味した上で、遺されたきょうだいの回復を検討している研究は Gamino et al. (2002) のみであり、社会的状況や文化差を踏まえた調査がほとんどなされていないことが明らかとなった。

(2) 意味づけを中心とした遺されたきょうだいの回復プロセス

先述した通り、遺されたきょうだいは、トラウマ反応や悲嘆反応に苦しみながら、家族関係の大きな変化といった多重の喪失を体験する (Gamino et al., 2002 ; Sundar & Nelson, 2003) が、友人や同じ経験をした遺族などと繋がり、上記の様々な対処方略を用いて、自身の気持ちと向き合ったり回避したりすることを繰り返して少しずつ変化する (e.g. Sundar & Nelson, 2003 ; Alves-Costa et al., 2018)。そして、そうした回復プロセスの中で生じるのが、「意味づけ」である。個々人において意味を模索する時期や期間は異なるが、意味づけは喪失に伴う様々な感情と向き合う中で生じるという点は共通している (Forward & Garlie, 2003 ; Kasahara-Kiritani et al., 2017 ; Sundar & Nelson, 2003)。意味づけが生じる際に重要となるのが、「継続する絆 “continuing bonds”」である。これは、故人と心の中で関係を維持し続けることを示し (Klass, Silverman, & Nickman, 1996)、遺されたきょうだいは、遺品を所持する (Sundar & Nelson, 2003 ; Packman et al., 2006)、日記などで故人とのポジティブな記憶を想起する、宗教的な視点からあの世にいる故人を想像するといった行為を通して、故人と内的な絆を結び直していく (Adams et al., 2018 ; Gamino et al., 2002)。この継続する絆は、遺されたきょうだいが故人の死を理解したり、故人がこれからの自分に何を

期待しているのかを考えたりする上で重要な役割を果たし、その結果遺されたきょうだいは自分自身を見つめ直し、創造的な未来に向かって新たな人生を歩む。つまり PTG を感じることに繋がるのである (Adams et al., 2018 ; Gamino et al., 2002)。

その一方で、継続する絆は故人が生きていた頃の関係性が反映されやすい側面も持つ (Packman et al., 2006)。故人と遺されたきょうだいは、家族力動上ライバル関係といった葛藤的な関係であることも多く、この場合予期せず故人を失ったことで、きょうだいは謝罪や別れの言葉が言えなかったなどと罪悪感が生じやすくなる (Packman et al., 2006)。そのため、心地よい内的な絆の形成が困難となることが予想されており、続柄に着目した継続する絆の差異を検討する必要性が指摘されている (Packman et al., 2006)。

IV. 考察

本研究は、遺されたきょうだいの文献レビューを行い、外傷的な喪失による遺されたきょうだいの心身への影響や、レジリエンスについて国内外の知見を整理し、これまでの研究の動向や課題を明らかにすることを目的とした。

(1) 遺されたきょうだいの体験やメンタルヘルスに関する研究の必要性

まず本研究では、国内外問わず外傷的な喪失を経験した遺されたきょうだいのメンタルヘルスに関する文献が乏しいことが示された。特に、国内では量的研究が乏しく、本邦の遺されたきょうだいの心身への影響を理解する上で、大規模な数量的研究が必要と思われる。喪失後の反応は、性別、年齢、対処方略などの「個人特性」、死因などの「状況的特性」、家族機能などの「環境要因」の3つが相互に作用して生じると考えられている (Packman et al., 2006)。特に、遺されたきょうだいの場合は、その発達段階によって周囲や家族関係の中で生じる体験、対処方略などに差が生じることが考えられ、年齢をある程度統制した上で、大切なきょうだいとの死別後の体験やメンタルヘルスについて調査していくことが必要と考えられる。また、縦断的な研究を行い、長期的な視点で遺されたきょうだいの心身への影響を理解することも重要であると思われる。

(2) 遺されたきょうだいに対するレジリエンス研究の必要性

海外では主に 2000 年以降、遺されたきょうだいの回復に必要な個人内外の資源や、そうした資源の相互作用から生じる回復プロセスについて検討がなされ始めていたが、我が国において、そうしたレジリエンスに着目した研究は見受けられなかった。遺されたきょうだいが有する個人内外の資源を有効に活用した支援のあり方を検討する上で、レジリエンスに関する知見の集積は重要な課題と思われる。さらに、国内外問わず課題と考えられるのが、レジリエンスに重要な文化や社会的状況を加味した研究が乏しいことである。Shalev et al. (2019) は、「大切な家族が殺害された場合は、復讐するべきだ」、「死は神がもたらしたものであるため悲しむことはいけない」といった価値観がイスラエルには存在

し、そうした文化的価値観が子ども達の悲嘆に大きな影響を与えていると指摘している。我が国においても、遺されたきょうだいは文化的価値観や社会的状況の影響を受けながら、様々な危機を経験していると考えられる。今後は、遺されたきょうだいのレジリエンス研究の乏しさを鑑みて、まずは仮説生成を目的とした質的研究において、遺されたきょうだいの個人要因（個人特性や対処法略）と環境要因（文化的価値観や社会的状況、家族、友人など）の相互作用から生じる回復プロセスを具体的に検討する必要があると考えられる。また、その際には先述したように、死因となった出来事の性質や発達段階も考慮し、各年代に生じる危機やそれに対する影響を緩和する個人内外の資源を明確にすることが重要と思われる。

(3) 遺されたきょうだいの意味づけ

遺されたきょうだいの回復プロセスを検討する際、喪失に伴う感情と向き合う中で生じる意味づけに着目することは重要と思われる。実際に、本稿でレビューした研究においても、意味づけを考慮した回復プロセスの検討がなされており（Forward & Garlie, 2003 ; Kasahara-Kiritani et al., 2017 ; Sundar & Nelson, 2003）、遺されたきょうだいは故人と内的な絆を結び直しながら、自身の成長を感じていくことが示されている（Adams et al., 2018 ; Gamino et al., 2002）。しかし、先行研究で取り上げられている意味づけは成長などのポジティブなものが多く、ネガティブな意味づけがほとんど検討されていない。また、故人ときょうだいはライバル関係を始めとした、親子とは異なる複雑な関係性であることも予想されるため、遺されたきょうだいの多様な意味づけを捉えることが必要であると思われる。Packman et al. (2006) が指摘するように、遺されたきょうだい特有の継続する絆の生成過程や、それを通じた意味づけを検討することは、きょうだいの心情に即した支援体制を構築する上で、有効であると考えられる。

(4) 回復とは何か

ここまで、本研究では「回復」という言葉を用いてレジリエンスについて概観してきた。しかし、遺されたきょうだいを含む、遺族の回復とは何なのだろうか。先行研究では、回復の明確な指標として、PTSD等の精神疾患の程度や（Cozza et al., 2019）、社会的適応が用いられるが、それは遺族の苦しみが無い状態を指すわけではない。遺族は年月を経るごとに、多様な視点から故人や故人の死について振り返り、様々な感情を体験しているはずである。石原・中丸（2007）は、レジリエンスが元の状態に戻るという意味合いを含む概念であることから、逆境の性質を考慮し、どのようなプロセスをレジリエンスとするのかといった定義を明確にすべきと指摘している。永続的に続くと考えられる遺族のレジリエンスの定義を明確にすることは、研究の重要な視点であると共に大きな課題と思われ、そうした視点に基づき遺されたきょうだいの縦断的な心的変容を検討することが今後は求められる。

なお、遺されたきょうだいの回復を捉える上で意味づけは重要な視点であると先述したが、Bonanno, Wortman, & Nesse (2004) は、ネガティブな出来事にそもそも心的影響を受け難い者は、回復に意味づけを必要としないと述べている。また、意味づけは自身の信念が一度崩壊するような苦痛を伴うプロセスであることから、あまりにも回復資源が乏しい者にはそのプロセスを耐えることが難しいとの指摘も存在する (Calhoun & Tedeschi, 2006)。したがって、個人内外の資源によって多様な回復の軌跡が存在すると考えられるため、これに着目した研究を行なうことも必要と思われる。

(5) 研究法の精緻化

国内外問わず、遺されたきょうだいに関する研究は乏しい現状にあるが、そもそもこうした研究の乏しさには、調査を実施すること自体が困難であるという課題が存在すると思われる。研究で用いる手法によって程度の差はあるが、研究を行う際には遺族であるきょうだいに故人の死や、自身について振り返ってもらう必要があり、これはきょうだいにとって大きな負担を伴う体験となることが予想される。赤田・坂口 (2020) は、犯罪被害によってきょうだいと死別した遺族に関する詳細なレビューの中で、調査によって二次被害を与えないよう、対象者の選定や調査方法、調査後のフォローなどについて十分な配慮を行う必要があると述べている。このように、外傷的な喪失を体験した遺族を対象に面接調査などの質的な研究を行う場合、遺族の悲嘆やトラウマ反応を十分にアセスメントしながら、丁寧にコミュニケーションを重ね、研究を実施していく必要がある。特に遺されたきょうだいは、親以上に故人の喪失について語る機会が乏しい可能性が考えられ、調査の実施自体が困難になることも予想される。

また、研究者側も研究プロセスにおいて、無力感といったトラウマに関する様々な感情を経験することから、研究を続けていくことそのものが困難であることも指摘されている (宮地, 2019)。そのため、対象となる遺族はもちろんのこと、研究者側も安全に研究が進めていけるよう、調査前から調査後に至るまでの配慮を含めた研究方法そのものを精緻化していくことも、遺されたきょうだい、ひいては外傷的な喪失を経験した人々に対する研究を発展させる上で必要不可欠と思われる。

引用文献

- Adams, E., Hawgood, J., Bundock, A., & Kölves, K. (2018). A phenomenological study of siblings bereaved by suicide: A shared experience. *Death Studies*, 26, 793-813.
- 赤田・坂口 (2020). 犯罪被害によるきょうだいとの死別体験に関する研究の動向 心的トラウマ研究, 15, 47-56.
- Alves-Costa, F., Hamilton-Giachritsis, C., & Halligan, S. (2018). "Everything Changes": Listening to homicidally bereaved individuals' practice and intervention needs. *Journal of Interpersonal Violence*, 886260518766558.
- Bonnano, G. A., Wortman, C. B., & Nesse, R. M. (2004). Prospective patterns of resilience

- and maladjustment during widowhood. *Psychology and Aging*, 19, 260-271.
- Bower, J. E., Kemeny, M. E., Taylor, S. E., & Fahey, J. L. (1998). Cognitive processing, discovery of meaning, CD4 decline, and AIDS related mortality among bereaved HIV-seropositivemen. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 66, 979-986.
- Calhoun, L. C. & Tedeschi, R. C. (2006). The foundations of Posttraumatic Growth : An expand framework. In L. G. Calhoun & R. G. Tedeschi (Eds.), *Handbook of posttraumatic growth : Research and practice* (pp. 1-23). Mahwah, New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates.
- Cohen, O. & Katz, M. (2015). Grief and growth of bereaved siblings as related to attachment style and flexibility, *Death Studies*, 39, 158-164.
- Cozza, S. J., Fisher, J. E., Fetchet, M. A., Chen, S., Zhou, J., & Fullerton, C. S. (2019). Patterns of comorbidity among beraved family members 14 years after the September 11th, 2001, terrorist attacks. *Journal of Traumatic Stress*, 32, 526-535.
- Currier, J. M., Holland, J. M., & Neimeyer, R. A. (2006). Sense-making, grief, and the experience of violent loss : Toward a mediational model. *Death Studies*, 30, 403-428.
- Dyregrov, K. & Dyregrov, A. (2005). Siblings after suicide- " The forgotten bereaved." *Suicide and Life Threatening Behavior*, 35, 714-724.
- Dyregrov, K., Dyregrov, A., & Kristensen, P. (2015). Traumatic bereavement and terror: The psychosocial impact on parents and siblings 1.5 years after the July 2011 terror killings in Norway. *Journal of Loss and Trauma*, 20, 556 – 576.
- Forward, D. R. & Garlie, N. (2003). Search for new meaning : Adolescent bereavement after the sudden death of a sibling. *Canadian Journal of School Psychology*, 18, 23-53.
- Gamino, L. A., Hogan, N. S., & Sewell, K. W. (2002). Feeling the absence : A content analysis from the Scott and White grief study. *Death Studies*, 26, 793-813.
- Harvey, M. R. (1996). An ecological view of psychological trauma and trauma recovery. *Journal of Traumatic Stress*, 9, 3-23.
- Henderson, D. X., Bond, G. D., Alderson, C. J., & Walker, W. R. (2015). This too shall pass : Evidence of coping and fading emotion in African Americans' memories of violent and nonviolent death. *Omega Journal of Death and Dying*, 71, 291-311.
- Hogan, N. S. & DeSantis, L. (1994). Things that help and hinder adolescent sibling bereavement. *Western Journal of Nursing Research*, 16, 132-153.
- 石原由紀子・中丸澄子 (2007). レジリエンスについて——その概念, 研究と歴史の展望——広島文教女子大学紀要, 42, 53-81.
- Kasahara-Kiritani, M., Ikeda, M., Yamamoto-Mitani, N., & Kamibeppu, K. (2017). Regaining my new life: Daily lives of suicide bereaved individuals. *Death Studies*, 41, 447-454.
- 警察庁 (2019a). 令和元年版——犯罪白書平成の刑事政策

- < <http://hakusyol.moj.go.jp/jp/66/nfm/mokuji.html> > (2020年3月5日閲覧)
- 警察庁 (2019b). 平成30年中における自殺の状況.
- < <https://www.npa.go.jp/publications/statistics/safetylife/jisatsu.html> > (2020年3月5日閲覧)
- Kennedy, B., Chen, R., Valdimarsdóttir, U., Montgomery, S., Fang, F., & Fall, K. (2018). Childhood bereavement and lower stress resilience in late adolescence. *Journal of Adolescent Health, 63*, 108-114.
- Khang, M., Lee, D. H., & Kim, Y. (2018). Parental perceptions of surviving sibling grief responses to an adolescent's violent and sudden death by the Sewol ferry disaster in South Korea. *Omega Journal of Death and Dying, 30222818777340*.
- Klass, D., Silverman, P. R., & Nickman, S. L. (Eds.). (1996). *Continuing bonds: New understandings of grief*. Philadelphia, PA: Taylor & Francis.
- 小西聖子 (2006). 犯罪被害者の心の傷 白水社
- Kristensen, P., Dyregrov, K., Dyregrov, A., & Heir, T. (2016). Media exposure and prolonged grief: A study of bereaved parents and siblings after the 2011 Utøya Island terror attack. *Psychological Trauma: Theory, Research, Practice, and Policy, 8*, 661-667.
- Kristensen, P., Weisæth, L., & Heir, T. (2012). Bereavement and mental health after sudden and violent losses: A review. *Psychiatry, 75*, 76-97.
- Lepore, S. J. & Revenson, T. A. (2006). Resilience and posttraumatic growth: Recovery, resistance, and reconfiguration. In L. G. Calhoun & R. G. Tedeschi (Eds.), *Handbook of posttraumatic growth: Research and practice* (pp. 24-46). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Levi-Belz, Y. & Lev-Ari, L. (2019). Is there anybody out there? attachment style and interpersonal facilitators as protective factors against complicated grief among suicide-loss survivors. *The Journal of Nervous and Mental Disease, 207*, 131-136.
- Lindqvist, P., Johansson, L., & Karlsson, U. (2008). In the aftermath of teenage suicide: A qualitative study of the psychosocial consequences for the surviving family members. *BMC Psychiatry, 8*, 1186/1471-244X-8-26.
- Lohan, J. A. & Murphy, S. A. (2002). Parents' perceptions of adolescent sibling grief responses after an adolescent or young adult child's sudden, violent death. *Omega Journal of Death and Dying, 44*, 77-95.
- Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. (2000). The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child Development, 71*, 543-562.
- Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology, 2*, 425-444.
- 宮地尚子 (2019). 環状島＝トラウマの地政学 (新装版) みすず書房
- Moss, E. & Raz, A. (2001). The ones left behind: A siblings' bereavement group. *Group Analysis, 33*, 103-114.

34, 395-407.

- 仲 律子 (2018). 犯罪被害者のきょうだいへの支援について 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 健康科学編, 1, 47-55.
- Norris, F. H. (1992). Epidemiology of trauma: Frequency and impact of different potentially traumatic events on different demographic groups . *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 60*, 409-418.
- 野坂祐子 (2006). きょうだいの喪失に伴うグリーフ・カウンセリングの過程—交通事故で弟を亡くした青年期女性の事例から—聖マリアンナ医学研究所 聖マリアンナ医学研究誌, 6, 83-88.
- 大和田攝子 (2006). 犯罪被害者遺族の心理と支援に関する研究 風間書房
- Packman, W., Horsley, H., Davies, B., & Kramer, R. (2006). Sibling bereavement and continuing bonds. *Death Studies, 30*, 817-841.
- Park, C. L. (2010). Making sense of the meaning literature : An integrative review of meaning making and its effects on adjustment to stressful life events. *Psychological Bulletin, 136*, 257-301.
- Pettersen, R., Omerov, P., Steineck, G., Dyregrov, A., Titelman, D., Dyregrov, K., & Nyberg, U. (2015). Suicide-bereaved siblings' perception of health services. *Death Studies, 39*, 323-331.
- Rostila, M., Berg, L., Saarela, J., Kawachi, I., & Hjern, A. (2017). Experience of sibling death in childhood and risk of death in adulthood: A national cohort study from Sweden. *American Journal of Epidemiology, 185*, 1247-1254.
- Rostila, M., Berg, L., Saarela, J., Kawachi, I., & Hjern, A. (2019). Experience of sibling death in childhood and risk of psychiatric care in adulthood : a national cohort study from Sweden. *European Child & Adolescent Psychiatry, 28*, 1581-1588.
- Rostila, M., Saarela, J., & Kawachi, I. (2013). Fatal stroke after the death of a sibling : A nationwide follow-up study from Sweden. *PLoS One, 8*, e56994.
- Rostila, M., Saarela, J., & Kawachi, I. (2014). “The psychological skeleton in the closet” : mortality after a sibling's suicide. *Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol, 49*, 919-927.
- Shalev, R., Dargan, C., & Abdallah, F. (2019). Issues in the treatment of children who have lost a family member to murder in the Arab community in Israel. *Omega Journal of Death and Dying, 0*, 1-14.
- 白井明美・中島聡美・真木佐知子・辰野文理・小西聖子 (2010). 犯罪被害者遺族における続柄の相違が精神健康に与える影響についての分析 精神保健研究, 56, 27-33.
- Sundar, P. & Nelson, G. (2003). Moving towards resiliency : A qualitative study of young women's experiences of sibling bereavement . *Currents, 2* .
< https://www.ucalgary.ca/currents/files/currents/v2n1_sundar.pdf >

- 高柳奈生・辻尾佳澄 (2003). 犯罪によってきょうだいと死別した子どもの人間的成長をどう支援するか 関西学院大学社会学部紀要, 95, 255-268.
- Tedeschi, R. G. & Calhoun, L. G. (2004). Posttraumatic growth: Conceptual foundations and empirical evidence. *Psychological Inquiry*, 15, 1-18.
- Van Riper, M. (1997). Death of a sibling : Five sisters, five stories. *Pediatric Nursing*, 23, 587-593.
- Wagnild, G. M. & Young, H. M. (1993). Development and psychometric evaluation of the Resilience Scale. *Journal of Nursing Measurement*, 1, 165-178.